

# 大江健三郎「狩猟で暮らしたわれらの先祖」論

——漂泊するわれらの先祖あるいは異族——

宋 仁 善

## 一、はじめに

大江健三郎の中篇『狩猟で暮らしたわれらの先祖』（以下、『狩猟で』）は、一九六八年二月から八月にかけて『文芸』に連載され、六九年には単行本『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』（以下、『われらの狂気を』）に収録された。

この小説に関する先行論は、単行本『われらの狂気を』を扱った評論の中で部分的な言及として止まる傾向にある。それはたとえば、①「文明と原始、現代と古代」の噛み合いを通して現代の危機と病根を照らし出す（野口武彦、渡辺広士、篠原茂、黒古一夫）、②現代人の内面的自由の探究（菅野昭正、秋山駿）<sup>②</sup>、③日本社会で隠蔽されている差別問題（高良留美子）<sup>③</sup>などと要約できる。つまり先行論の大部分は、漠然と〈現代〉という時代が漂わせる狂気と、作者が自ら照らし出そうとする自己内部の狂気に関するものに集中している。

先行論で共通しているように、この作品はひとまず現代文明への反省的な眼差しとして読み取ることができる。作品の中で

「僕」は自分の目の前に現れた「流浪家族」を通して、オーデンの詩に出てくる狩猟種族、つまり、はるかな原始を幻視する。「僕」の幻想が幻滅に終わり、結末で、「早急な手術なしではとりかえしのつかない不具になるであろう」（一五三頁）<sup>④</sup> 幼女の体は、まさしく作者の察知する、現代という時代自体の「とりかえしのつかなさ」として感じ取られる。

しかし、そうした読解は作品のテーマを抽象化しすぎて、「時代と状況の作家」といわれる大江の作品から、同時代の中の、より具体的な状況への作者の洞察と反応を読み逃すおそれがある。この作品を、より具体的な時代的脈絡の中に置き直すことによって、先行論で共通している「〈現代〉が漂わせる狂気」の内実がより明確になり、「時代と状況」にもっと密接した新しい読解が可能となると考えられる。

『狩猟で』は、明治維新から百年が経過した時点で書かれた小説である。その時期、日本社会には政府を中心に明治百年を積極的に評価し祝う雰囲気と、それとは反対に、明治への批判の動向が共存していた。そして、明治百年を振り返るこれらの動きの中で、民俗学や古代学に対する関心も高まっていた。一

方、この作品には、柳田国男の「山人」を想起させる「山人」——狩猟種族の後裔が登場している。そして、わずかな部分ではあるが南島沖繩と樺太からの「オロッコ人」、折口信夫の実名と彼の著作物も挙論されている。

本稿は、この作品を明治百年が経過する六〇年代末という時代相と照らし合わせ、作中の「山人」、「オロッコ人」、「沖繩人」など、周縁的な存在を結びつける共通点を抽出し、先行論ではまだ触れていない作者の沖繩体験とこの作品との関係、沖繩への眼差しを窺い、この小説を読み直すことを目的とする。

## 二、民俗学と国家論の時節

この作品が書かれたのは一九六八年のことで、作品の中の時代背景も執筆時期と同じ時期であると考えられる。それは、作品の中で、「僕」の幼年期に起こった「山人」のテント生活と追放事件が一九四四年と記されており、流浪家族が東京の「僕」の前に現れたのは、その時から二十何年ぶりのこととなっているからである。

東京に住んでいる「僕」の前に、ある日突然出現する流浪家族は、後で明らかになるが、「僕」の故郷で「山人」と呼ばれていた森林地帯の奥の部落民の子孫である。呼称から柳田国男の「山人」を連想させる彼らは、狩猟と皮革、竹細工、農具の修理などによって暮らす被差別部落民として「僕」の記憶に残っており、「僕」の父は彼らの追放と流浪に中心的な役割を果たした人物として設定されている。

大江が柳田と折口の書物を好んで読み、彼らから深く影響されているのは、作者自身の文章や話を通してよく知られている事実であり、その影響関係が見られる作品も単にこの作品だけではない。しかし、この作品は実に多様な構成要素において柳田・折口との関わりが下地として感じ取られる。例えば、山と南島を行き来する「僕」の観念の動線は、直接柳田の学問の軌跡を連想させる。また、「僕」の息子の失踪事件は〈神隠し〉のパロディーとして読める。折口信夫という実名とその著作が作中に挙がってもいる。「山人」は、まるで戦後の日本が目差してきた都市文化の対極であるかのように、「僕」のノスタルジーを刺激する。

それら民俗学的要素と作品の中に挿入されている沖繩はどういう関係にあるのだろうか。

柳田の最後の著作となった『海上の道』が出たのは一九六一年のことである。周知のとおり、『海上の道』は日本民族の起源が沖繩にあるという仮説を掲げている。次の年、柳田は亡くなり、六〇年代後半、日本では柳田国男再発見の動きが起こる。そして島尾敏雄が、いわゆるヤポネシア論を展開して、「琉球弧に原日本の縄文文化の特質がある」と、南島へ新しい照明を当てたのも、だいたい同じ時期である。次の資料は、当時の民俗学の流行と南島への眼差しをよく説明している。

さて、柳田によって見いだされたこの「南島」は、(略)一九六〇年代末にいたると、しばしば積極的に「思想」として語られており、文字どおりイデオロギーとして機能し

ていることである。(略) この第二次南島イデオロギーの発生は日本が高度成長を遂げ、全共闘運動がついに「学園」内部にとどまり、そして本居宣長などとともに、柳田国男が復活し、彼が単なる一学問の創始者にとどまらず「思想家」として語られ、ブームとなった時期に当たっている。

(略) つまりこの時期「南島」はいわば日本的「特殊性」の擁護者、柳田とその「民俗学」の流行とともに相前後して見いだされ、多重な意味を担い、「日本」にとつてもっとも根源的な場所として、あたかも聖なる場所として見いだされた。(傍線筆者)

一九六〇年代末は敗戦後の日本文化の変動期として知られている。学園問題と沖繩問題に要約される一九六〇年代末から七〇年代初期は、「明治以降の日本がその実現をめざしてきた近代欧米型の文化モデルを疑う」という「自省」の働きがあった<sup>8)</sup>時期である。つまり高度成長に伴い、敗戦直後の民主主義と豊かな先進国モデルとしての西欧文化への憧れから脱皮し、近代文明への懐疑と自省、自国文化のアイデンティティ、自国文化の肯定的な面を照らしだそうとする動きが始まる時期である。

特に一九六〇年の安保条約改定、六〇年代末から七〇年代初にかけて沖繩返還をめぐる反米感情の高まりは、日本人の自国文化への帰属意識をより刺激したと推測される。まさしくこの時期、日本社会の一角では柳田の民俗学が復活するのである。「原日本」としての沖繩の位置付け、本土だけの「日本」でなく「日本列島」という共同体観念の普及、沖繩返還と関連してそ

の根拠としての日琉同祖論の再浮上など、柳田・折口の復活は六〇・七〇年代における日本の時代的要求でもあったといえる。

一方、同じ時期、日本の知識人の間にはもう一つの顕著な動きがあった。国家論の盛行がそれである。その中で吉本隆明は、「山人」の出典である柳田国男の『遠野物語』と『古事記』をテキストとして活用し、日本における国家起源の問題を古代統一部族国家の共同観念という観点から探った著作『共同幻想論』(一九六八年)を出している。吉本がこの話題作に取り組んだ主たる目的は、国家権力、特に天皇制国家権力を根底的に批判するためである。<sup>10)</sup>

同時代の代表的な知性として、かつて安保闘争に関与し、六〇年代末の全共闘運動などにも広汎な影響を与えた吉本が、当時の大江に何らかの形で影響したことは言うまでもないだろう。大江は一九六五年、自分が編集委員として参与した講談社の『われらの文学』シリーズの中で、『江藤淳・吉本隆明』編の解説を自ら執筆するなど、吉本への高い関心を表している。そして『共同幻想論』前半部は、『狩猟で』が連載される一年程前、同じ雑誌『文芸』に連載されている。

本作品にも『共同幻想論』からの影響関係が窺われる部分がある。次の引用文は『共同幻想論』の「禁制論」の一部分である。

村の猟師が獲物をもとめて山に入った。山を駆けずりまわって大へん疲労をおぼえた。この疲労は判断力を弛緩させ、そのとき白日夢のように山人に出会い、あたかも現にあるかのような光景を視させる。人のあまり通わない深山

で獲物をもとめる猟師たちの日常では、しばしばある種のおなじじ想いがとおりすぎるであろう。猟師たちは山のなかを歩きまわって獲物をもとめているのだが、そのときの心の世界は奥の奥を独りでたどってゆく体験にた時間をもつはずである。このとき、山人がいるとか、人さらいがいるとか、山奥の雰囲気をおそれた体験や言い伝えを、幼児のときにでもきいていたとすれば、猟師はたやすく山人に出遇い、山人を銃で撃ち、山人と話を交わすという入眠幻覺をうることができるはずである。

(略) そして山人譚が各地に民話として分布するのは、おなじような生活をしている猟師たちに固有な幻想がある共同性を獲得してゆくからである。(傍線筆者)

上記の引用文で、吉本は日本における山人譚の伝承が、実は「入眠幻覺」の状態から発した共同観念であると述べている。

一方、「幻」・「幻想」あるいは「夢」のモチーフは、『狩猟』においても重要な構成要素となっている。本作品には、冒頭部に「僕」の夢が登場する以外に、その詳しい内容は出ていないものの、合わせて五箇所「僕」の「夢」という言葉が出ており、「幻」・「幻想」という言葉も頻繁に使われている。そしてその大部分は「流浪家族」や故郷の「山の人」と関わる箇所使われている。

① そのうちに僕は真冬の、ブナの木の下といえ戸外の夜明けかけの地面にじかに置かれた椅子に坐ったまま眠り

こんだ。男が話したこと、なおも話つづけていること、それそれを反芻したり、新規に咀嚼したりしながら、心理の岩棚にうつとり坐っていると、現実におこっていることと夢においておころうとしていることのあいだの障壁は、鉛のようにとける。あの真夜中から夜明けがたのすべてをいま思い出そうとすると、どこまでがあの流浪する一家の家長の話であり、どこからがそれにもとづく僕の夢のつくりあげた世界であるか判然としない。また、その夢が不意にたちきられて、それから現実には僕のみじめな眼の見たところのことについても、どの部分までが夢の世界の尾をひいており、どの部分からはすっかり具体的な現実であるのかが不明瞭なのだ。

しかもそれらのさかいいめをくつきりさせることを望まぬ自分を見出す。(二二頁) (傍線筆者)

② 僕は焚火の向こうに蹲みこんでいる男のうつむいた赤黒い顔に炎の照りかえしが隈どる深い皺を見つめた。気の滅いりつづけるどん底の気分から立ちなおりつつある自分を感じる。焚火をへだてる冬の真夜中の暗闇に、オーデンのいわゆる「狩猟で暮らしたわれらの先祖」が蹲んでいた。射とめられた獣たちの瀕死の眼に、人間という存在の高みへの絶望的なあこがれがやどっているのを静かに見かえした、狩するわれらの父祖。(二七頁) (傍線筆者)

②で、「僕」は「流浪家族」の家長の姿から、オーデンの詩

に出てくる〈狩獵で暮らしたわれらの先祖〉を見ようとする。しかし、「僕」が見る家長の姿がどれほど現実と離れている幻想であるかは、後で家長が自らを「退化してしまつた」(一四一頁)と認める場面や、彼らのゆすり・当たり屋の行動を通しても分かる。そして引用文①で分かるように、本作品の「僕」と「流浪家族」との対面場面は、吉本の山人譚の分析でいう〈入眠幻覚〉状態のように描かれていて、『共同幻想論』からの影響が推測される。

以上から分かるように、柳田・折口の民俗学は戦後「新国学」として第二の全盛期を謳歌し、特に六〇年代末からは沖繩返還とあいまって流行となつていた。その頃、国家論も活発に論議され、吉本隆明の『共同幻想論』は知識人の間に少なからぬ反響を呼んだ。『狩獵で』の執筆は時代的にそういう流れの中にあり、それ故、本作品の中で民俗学と沖繩は当時の時代相の積極的な反映として読むことができる。

### 三、漂白する先住民、あるいは異族

この作品は、東京のある中産層共同体の内部に、外部からの周縁的存在、つまり狩獵種族の末裔「山の人」が入り込んで、二つの異質な文化が接触・衝突し、ついに外部者は追放され、その結果既存の共同体はより強固なものになる、という基本構造を持っている。それは、「異人」の排除をつうじて、組織体は組織体自身になる<sup>12)</sup>という、共同体内部の〈排除の構造〉の民俗学的な図式にそのまま当てはまる。東京の「閉鎖的なプチ

ブルジョワの住宅地」(九四頁)で、しばらく定住を試みる流浪家族は、共同体内部のアイデンティティと秩序をより堅固なものとするために必要とされる秩序周縁部の他者、つまり「異人」といえる。

吉本は、血縁を基盤とする原始共同体が古代国家形態である統一部族社会へ移行する際、その共同性形成における法、道徳、倫理の役割を強調する<sup>13)</sup>。本作品の中で「流浪家族」は、まるで古代から現代へ出現したかのように「僕」を幻視させるが、吉本の論を彼らに当てはめてみると、一夫一妻制を無視し、積んである白菜を平気で盗むなど、明らかに六〇年代の日本社会の共同性からはみだす異質の存在として描かれている。

異人の範疇は様々であるが、その中でも本稿は、この作品に登場する「流浪家族」あるいは「山の人」が、異族の表象である可能性に注目する。「山の人」が柳田国男の「山人」のパロディとして読めるということは、前述したとおりである。柳田によれば、「山人」とは、稲作を生業とする今の日本民族(大和民族)が外からやつてくる前、日本に住んでいた「野蛮な」土着民、先住民である。彼らは外来者の支配を避けるべく山へ逃げ、山人となる。つまり、そもそも「山人」は大和民族とは違って、狩獵と採集を生業とする異族であることが前提されている。鶴見和子は、それが日本社会に長く存続してきた被差別部落の構造までつながっていると指摘している<sup>14)</sup>。本作品の「山の人」も、山羊を屠殺し、被差別部落と似通つた形で描写されているが、何より、その容貌の描写が、彼らの異族性を暗示する。

①一瞬、僕を見あげた老女が、濃く太い眉の立派な大きい顔をしているのを僕は認める。(二〇〇頁)

②かれの短く刈つた頭の、しかもなお濃く黒ぐろとしているところや太い眉は老女に似ている。額は狭く、そこにはなまなましい肉の皺がきざまれ、眉の上の皮膚は強く盛りあがつている。鼻梁も頬も、おなじく動物的な精気にみちている。そしてきわめて細い眼、小さな耳。軽くひらいている口は、唇があまりに薄いために顔にきざまれた切りくちのように見えるのみで、いかなる感情もあらわさない。(二〇〇頁)

③そして同時に自分が、流浪する一家の家長たる男の風貌を明るい光のもとで見ることができなかつたことを心残りに感じているのをまた感じた。僕はかれの顔に「山人」の特徴を見出すことができるかどうかを試みるべきではなかつたか？(二〇三頁)(傍線筆者)

③の引用文を通して、少なくとも「山人」が普通の人とは違う外観的な特徴をもっていることが推測できる。

「山人」が異族である可能性は、大江の前作とも関係があるようにみえる。大江の作品の中で、山奥に住みながら村人とは違う異質的な雰囲気を漂わせる集団が登場するのは、『狩猟で』以外にもいくつかがある。例えば「遅れてきた青年」(一九六二年)の〈高所衆〉、「ブラジル風のポルトガル語」(一九

六四年)の〈番内部落〉などがそれである。高所衆はその名前において台湾の先住民である高沙族を思い浮かべさせるが、高所衆も番内部落も、作品の中で異族として明示されてはいない。しかし、二つともその起源において異族の可能性が窺われる。まず「ブラジル風のポルトガル語」には番内部落の名前について次のような説明がある。

「いや、その逆だ、おれはショックをうけているよ、あの部落の名の番内だが、それは、鬼という意味だね。折口信夫の論文に出ている、出雲の杵築の春祭りの鬼だ」

「鬼？あの窪地の連中が鬼の種族だったとでもいうのか？いまかれらは集落を去つて再び鬼になったのか？しかしあの部落はもともと戦争のおわりにできた開拓部落だからなあ。よせあつめのごく普通の連中の集落だよ。」

折口信夫によれば、春祭りにくるまればとは、多く鬼・天狗、怪物とも考えられる。民譚の中で山人・天狗・妖怪・河童が異人として同一線上に置かれている点を考えれば、「ブラジル風のポルトガル語」での鬼とは異人たる山人である可能性がある。つまり、今の番内部落は「ごく普通の連中の集落」にみえるが、その起源をさかのぼると異族としての「山人」までたどりつくようになるのである。

自伝的小説として知られている『遅れてきた青年』の「高所衆」も、異族である可能性が次のように表されている。

〔前略〕高所様は戦争に關係なし、天皇陛下に關係なし、日本に關係なしぞ！この村に、日本人がくるまえの神様ぞ、四國に天照大神アマテラスよりまえに住んじおつた人間の、生きのこりの唯一つの村の神様ぞ！〔後略〕（傍線筆者）

家並の向こうに小さな広場がある、そこで高所衆は山羊を殺す、（略）高所部落が川上にあることを認め許容していたのは、高所衆が本来、高い場所に住んでいる人々で、ずっと昔から部落がそこにあつたからだ、郷土史家はそういつていた。しかし、戦死したわたしの兄は、川向うの公有林がかつては高所衆のものであつたのだといい、また高所衆の不具は、狩猟を禁じるための刑であつたのだともいつていた。

『狩猟で』の「山の人」は、これら先行作品の延長線に置かれているといえる。生活習慣や村の由来も、上記の引用文と類似している。両者とも国家意識が希薄で、平地で住んでいる普通の国民——〈天皇の民〉とは言いがたい種族として描かれている。

僕は、自分の部屋に戻って、一九四四年夏の出来事を考えた。われわれの谷間の出身の青年が普通寺の軍隊を脱走した。憲兵が谷間に来て捜索し、脱走兵が森林地帯に逃げこんだ際に、国家意識が希薄だといわれる「山の人」たちが、かれをかくまうのを予防するために、その全家族、ほ

ぼ二十世帯を疎開させ、われわれの国民学校の校庭でテント生活することを強制した。（九一頁）

それは、われわれの谷間をかこむ森林地帯の奥の、狩猟と皮革、竹細工、農具の修理などによつて暮す集落の人々のみが、使用している手鉤だからだ。もし、われわれの谷間の人間や、「在」の農民が、この手鉤を使用しているのを他人に見られたとしたら、かれはじつは「山の人」であつたのだという噂か、かれは発狂してよこしまなことを企画しているのだ、という噂をたてられて、結局は村の共同體から疎外されるだろう。（九〇頁）

引用文で分かるように「山の人」も「高所衆」も、先住民でありながら〈先住〉という権利を正当に認められず、同化と差別を強いられる存在として造形されている。柳田の「山人」が、日本の外からきた外来者（天つ神）の征服によつて漂泊と森林生活を強いられる先住民（国つ神）であるという事実は、おそらく、大江がこの作品の流浪種族の呼称を「山の人」とした意図と關係があるようにみえる。つまり、大江は国家論と沖繩論が活発にかわされた六〇年代末、世間で言われる〈沖繩におけるアメリカの侵略〉だけでなく、日本自らの神話と歴史に潜んでいる支配と侵略の要素を、改めて喚起したがつたのではないだろうか。

作品の中の「オロッコ人」についても同じことがいえる。流浪家族の家長の話を通して短く登場するオロッコ人、そして樺

太(サハリン)は、実は一九世紀末の領有権をめぐる日露の交渉をはじめ、侵略と征服という近代の波がどこよりも激しかった地点である。辺境という地政学的特徴を沖繩と共有している樺太は、日本とロシアの間で何回もひっくり返される島の帰属問題、住民の強制移住、日露戦争による南北分断など、その歴史においても沖繩との共通点が多い。両者とも、明治以後の膨張主義と領有権紛争の中で自らの伝統的な共同体基盤を失い、近代国家体制への帰属を強いられたという歴史を持っているのである。作品の中のおロッココ人が、戦時に日本軍に協力してスパイ活動をした理由でやむを得ず日本に引き揚げたという設定は、彼らの流浪の歴史が近代日本の歴史と無関係ではないということを通じてくれる。このことは、「山の人」の流浪の始まりが戦時の日本軍脱走兵のせいであったという設定ともつながる。結局、作中の「おロッココ人」と「沖繩人」「山の人」は、明治以後、日本の膨張主義の歩みにより自らの歴史の屈折を経験せざるを得なかったという点で共通しているのである。

①それからかれが話したおロッココ人の樺太引揚者の噂。戦時に日本軍に協力してスパイ活動をしていたおロッココ人の数家族が、ひとりの巫女ともども舞鶴に引揚船で到着した。

かれらは日本本土でもヤマトナカイの棲息している森と、蛙ののぼってくる川があると信じている。(略)―連中は森や川の外觀でもって見当をつけて獣を殺すように、永年育つてきているからなあ、未開人ですよ。実際、憐れ

で腹がたつよ、と男はいった。滑稽な連中だけれども考えると気が滅入るなあ。あいつらがいまも綱走のあたりにいて、(略)ヤマトナカイの大きいのを期待しているかと思うと厭だなあ。もつともおれたちもその類だがね、ただ、おれたちは永年本当の獲物がないことを承知してきたですよ。(二七頁)

②われわれの噂を聞いて樺太から引揚げてきたおロッココ人のやつらも情報とりにきたことがあるが、連中は話にならないよ、未開人だからなあ。神宮外苑に罾をしかけて張りこんだというくらいのものでね、ヤマトナカイをどううとして!(二二七頁)

引用文②で、おロッココ人がよって明治天皇を祀る神宮で狩りを試みる場面は風刺的である。前に述べたように、「山の人」という流浪家族の呼称に、支配と征服の日本神話、天皇のための聖戦たる日本帝国主義への批判が込められているとすれば、「山の人」、「沖繩人」、「おロッココ人」、そして家長の話に出てくるアメリカのインディアンまでも、近代化と国家主義の流れの中で自分の領土を奪われ、漂泊しつづける先住民の表象と読むことができる。

一方、作中での「僕」の父が密かに抱いていた漂泊や自由への憧れは如何なる意味を持っているのであろうか。大江は日本の民族イデオロギーの縦の軸として、(神)↓天皇↓国家組織としての警察機構↓村の共同体↓父親」という図式を想定する。そ



うした流れの中で、「僕」の父の憧憬は、まさに「有主・有縁」の世界、つまり共同体あるいは国家への「強いられた定住」があるがために生じる、〈無主・無縁〉の世界への憧憬<sup>①</sup>として解釈するべきではないだろうか。強いられた漂泊も、強いられた定住も、自由な人間の生き方とはいえない。問題は、漂泊であれ定住であれ、それを強いる存在の正体はいつたい何であるかという点であろう。本作品で父の自由が喚起するのは、背後に隠された、その自由を妨げる存在への問いかけだと考えられる。

#### 四、沖繩をめぐって

六〇年代末から七〇年代初にかけて、沖繩返還運動は巨大な国民的運動へと発展していく。『沖繩ノート』（一九七〇年）を通しても知られているように、大江健三郎は沖繩に対して並々ならぬ関心を寄せる作家の一人である。本作品の連載が始まる直前である一九六七年一月にも、大江は佐藤・ジョンソン会談を沖繩の目でとらえるルポルタージュを書くために沖繩に旅行している。大江はこの探訪の結果を同年二月『週刊朝日』に、佐藤首相への公開抗議手紙「沖繩の嘆きと憤りを共有するために」と、「すべての日本にとっての沖繩」というルポの形で発表する。

『狩猟で』の執筆は、沖繩への取材旅行から三カ月も経っていない時点で始まるが、その冒頭部で犬に咬まれる幼女の話は、三カ月前に大江が沖繩で聞いた軍用犬訓練の話と、それに

まつわる大江自身の悪夢体験談と関係があると考えられる。下記の引用文<sup>①</sup>は、例のルポに紹介された彼自身の悪夢体験談であり、<sup>②</sup>は、本作品の冒頭部である。

① 那覇のホテルでなやまされた悪夢。暗いみどりと黄の迷彩をほどこした、厚いテント地の防護服を着て、嵩ばるカカシみたいに立っているぼくに、軍用犬が咬みかかる。米軍のベトナム作戦用に訓練されるシェパードのための、咬まれ役を志願した沖繩の基地労働者<sup>②</sup>であるらしいぼくを、恐ろしい犬の大きく重い躰が押倒す。

この夢は、沖繩についた日の真夜中、中部の基地の町ゴザの、米兵のための歓楽街で聞いた軍用犬訓練の話にもとづいている。また、そこで感じた、ベシミスティックな現実<sup>③</sup>悪感にむすびついている。  
(傍線筆者)

② 夜明けがたに、幼女が犬に咬まれたといつて救助をもとめる叫び声が聞こえた。また、犬の吠え声もひと声だけ、舗道からたちのぼるのを聞いた。それは悲鳴のようにも聞こえた。この時刻に、舗道を幼女が歩いているのは、どういふことかと不審に思いながら、僕は眠った。背後に髪をたなびかせながら、目鼻がなく蒼ざめた丸いのつべらぼうの幼女が、足頸に夜着をからませて、薄暗い舗道を逃げてゆく。ウイスキー色の大きい犬が追いつがり、交尾する具合に両前足を幼女の肩にのせる。朝、妻にこの恥ずかしい夢のことを話すことはしないで、(後略) (八九頁)

軍用犬訓練のための咬まれ役を志願する沖繩の勞務者と、自分の身体毀損を自ら招く「当たり屋」には共通点が見られる。二つとも伝統的な人間の尊厳性を金銭と交換する新種の職業(?)である。特に「当たり屋」に関して言えば、一九六六年、「子連れ当たり屋」事件が実際に起こっている。この事件は日本社会に大きな波紋を呼び起こし、後に大島渚監督によつて映画化もされる。作中、当たり屋家族の幼女が冒頭部で犬に咬まれるという象徴的な設定は、大江によつてこの二つの事件——沖繩の軍用犬訓練の話と「子連れ当たり屋」事件——が、その本質においては異なるものではないということを示唆する。

本作品が書かれた時期は、ベトナム戦争の影響もあつて沖繩に向ける本土の関心が次第に高まりはじめる時期である。しかし、明治政府の「琉球処分」といった歴史が厳然と存在しており、昔から「日本の中の異国」という特異な立場に置かれていた沖繩を日本に帰属するのが、果たして妥当であるかどうかという点は、日本の知識人にとつて非常に微妙な問題であつた。日本復帰論の世論の一角で沖繩独立論が台頭し、日琉同祖論への批判が起こつたのもこの時期である。また、沖繩人にとつても同じく、当時の日本人(本土人)に同族意識を抱くのをためらう部分には確かにあつた。実際沖繩では、敗戦直後の「やまと世」から「アメリカ世」への世変わりを迎える雰囲気があつたし、それは戦争中、日本による沖繩の被害がそれほど酷かつたことの反証ともいえる。

大江の文章や発言を通してみる限り、沖繩返還をめぐる大江

個人の立場は返還賛成の方に傾いており、不当な差別に曝されてはいるものの、基本的には沖繩人も同じ日本人である、という立場を取つていようにみえる。しかし『狩猟で』の直前に書かれた例のルポには、日本復帰を好まない一部沖繩人の声が率直に込められており、沖繩に対して本土の知識人が抱く罪の意識が表されている。

① 《祖国復帰についてどう思うかということですが、私の考えとしては復帰しない方がいいと思ひました。(略)  
……子供っぽい考え方と思うかもしれませんが、なぜ、私たちだけが戦争したのではないのに、私たち沖繩人だけが犠牲にならなければならないのでしょうか。それも、今までは誰のせいでもないという顔をして、沖繩を今ごろ二十二年間もほつておきながら、今ごろから祖国復帰だという、日本人の人をにくらしくてたまりません。(傍線筆者)

② 明治百年の空さわぎに即していえば、沖繩の明治百年とは「琉球人と朝鮮人おことわり！」という言葉が端的に差別を代表した戦前から、大量の犠牲者の屍にのりかかつた戦時、そして生き残つたかれらを異邦人の支配下に見棄てて、その苦境を横目にみながらも、そこにある基地をひそかに頼りにしてあぐらをかいていた本土の日本人が、まさにそのような人間たるほかない所へ穏和な沖繩の日本人を追いつめたのである。(傍線筆者)

上記の引用は、当時の沖繩人と本土人の相互認識にずれがあったことを表している。②で、本土人である大江は彼らを「沖繩の日本人」と指している。しかし、沖繩の女子中学生の作文である①の引用文によれば、当時の沖繩人は自分たちを日本人とは思っていないかつたようである。例えば「日本って、そんなにいい所かな、私、日本ってきらいだな」という文章も出ているなど、彼らには本土の日本とアメリカが同じく外国であったようにみえる。そんな雰囲気を感じた大江は、同じルポで「今日の支配者アメリカ人のイメージがそのまま、明日の支配者、本土の日本人というイメージ」を作ったと書いている。そしてそうした認識は結局、ルポで前述した悪夢の中の軍用犬の正体が他ならぬ本土の日本人であるという認識までに至っている。

悪夢がかさなるうち、汗みずくで恐怖と嫌悪に歯がみしつ、嵩ばるカカシさながら逃走する僕を、追いかける犬の正体はあきらかとなった。沖繩で様々な民衆の声を聞いてあるきつづけたことで、やがて僕を苦しめる犬は沖繩の日本人をこのような状況のうちにおいて鈍感におちついている本土の「日本人であること」にほかならないと感じられたのである。<sup>23</sup>

つまり沖繩人に咬まれ役をさせているのが本土人であるということになる。そうした罪の意識が小説の中では「山の人」に對する「僕」の贖罪感に寓意的に変形されていると考えられる。小説の冒頭部で幼女が犬に咬まれる事件もその延長線にあると

すれば、この小説の「沖繩人」と「山の人」は、同じく近代国家体制と帝国主義の波の中で居場所をなくし揺れ動く、先住民、あるいは異族として描かれていることになる。「山の人」の「当たり屋」は、沖繩人の「咬まれ役」と本質において同じものなのである。

ルポとは違って、本作品では当時の尖鋭な問題であった沖繩の米軍占領と返還問題について直接には語られていない。しかし沖繩返還をめぐる当時の大江の複雑な心境は作品の中に反映されている。例えば、狂女二人の「僕」に對する罵りからは、沖繩人の、当時の本土人に抱いていた敵對の感情が読み取れる。下記の引用文で、狂女たちは、フェリー・ボートから降ろされる牛と豚を罵る。そして、同じ調子で「僕」を罵る。

①短いクレーンによって牛が降ろされる。腹にまわした数条の皮帯に支えられて宙づりになった若い雄牛は動揺して中天を眺め、大量に脱糞する。続いて鳴き叫ぶ豚の一群がもつと冷淡に降ろされはじめる。四肢をひとまとめに縛られた輝く桃色の豚は、低い甲板の底で横倒しになりただ鳴き叫ぶだけだったし、港の地面についてもおなじだ。二人の肥満した狂女が揃ってあらわれて、豚どもを罵る。頭を童女風に刈り、ごわごわした鉛色のズック布地の服で巨大な胴を覆っている。豚どもの叫喚にうちかつべく、重いしわがれ声で罵りつづけ、そして苛いらと足をふみならしては性急な舞踏をおこなう。真丸な鉛色の顔にみなぎる絶な意志は、全人類の威厳をになつて獸たちに対抗する者

たちのものだ。↑猷を罵る（二〇五―一〇六頁）

②肥満した狂女ふたりが叫び罵りながら僕の周りで舞踏する。われわれを遠巻きにしてひかえめな見物人の人だかりがある。（中略）狂女たちの怒りたけつた罵声の意味を理解することはどうしてできず、また僕を囲む人々の環のざわめきも、すべて僕の理解しえない方言によつておこなわれていると感じられる。狂女たちはますます激しく切迫した勢いで叫びたてる。（中略）狂女たちは、襲いかかつてくるかもしれない。逃げ出そうにも僕の足は酔いに麻痺している。（中略）それに、この二人の狂女と遠巻きにしている見物人たちをひきつれた、泥酔している他国者が手をあげてもタクシーが停車するだろうか？

↑「僕」を罵る（二〇八頁）  
（傍線筆者）

上記の引用文で、牛と豚は沖繩の米軍用として運ばれたと推測できる。それらに対する罵りは、当時、沖繩人の反米感情の現れであろう。そして「僕」に対する罵りは、当時の沖繩住民にとつては、本土人も米軍と異なる存在として認識されていたことの裏付けとして読める。前述した大江のルポを通して、も分かるように、当時の沖繩人が本土人に抱いていた感情は、反米感情と異なる種類ではないということ、大江は旅行を通して自分の肌で実感していたと考えられる。その経験が小説の中では、本土人である「僕」への、沖繩住民の罵りと冷淡さと

して反映されている。

新たに柳田のブームが起るなど、本土では沖繩返還をめぐり、沖繩を同族視する雰囲気が高まるが、作中の沖繩の描写は、本土との同質性よりはむしろ異質性を強調しているように見える。「僕」はパスポートを身につけて、外部者として島を観光しており、二人の狂女が行う速い舞踏や亀甲墓は、本土人には見慣れない風景である。彼女らの罵声は「僕」には「理解しえない方言」（二〇八頁）で行われ、彼女らの舞踏は〈隼人〉を連想させる。かつて隼人が大和朝廷に抵抗したへまつろわぬ民」であったことを想起すれば、そこにも本土の皇民とは区別される沖繩人の独自性が暗示されている。沖繩旅行記に描かれているそれらの異質性は、沖繩が明治政府の琉球処分（一八七九年）以前は、日本とは別の国、琉球王国であったという事実を語っているかのように見える。そこには、沖繩問題の現実的な突破口として沖繩の日本復帰運動に同調しながらも、沖繩固有の歴史、独自性、その意義まで本土に服属させることは願っていない大江の微妙なスタンスが窺われる。

作者のそのような立場は、本作品の中で、柳田の書物でなく敢えて折口の『沖繩探訪記』が登場していることにも関係があると考えられる。作品の中で「僕」は沖繩旅行の際、折口の「沖繩探訪記」を持参している。作者はなぜ、その当時盛んになっていた沖繩の日本民族由来説の『海上の道』（一九六一年）ではなく、一九二三年に書かれた折口の書物を登場させたのであろうか。南島における柳田と折口の視線の差異を、大江は、この作品が出た後行われた大岡昇平との対談で、次のように

語っている。

大岡 折口さんは短文なんかでも割に攻撃的ですよ。実際、タッチが違うんだな。柳田さんとの違いはどうだろう、例えば沖繩を……。

大江 沖繩の場合、柳田国男は、やはり本土が心の中にあると思うのですね。「うつぼ舟」の話にしても、海の向うよりは、渡ってきたこちら、渡ってきた記憶なんかなくなっているこちらが大切なわけです。折口信夫の場合は、海の向うの人間に対して、固定観念がないというのか、自分は海の向うの人間であつてもいいというような感じさえあるように思います。

沖繩問題は、今までの歴史で繰り返されてきたように、決して本土の立場から解決してはならず、沖繩自身の立場から解決の糸口が模索されねばならない、ということ、大江は様々な文章を通して明らかにしている。本作品の中で、本土中心の柳田ではなく、比較的「固定観念」が少ない折口の実名が登場するのも、そういう作者の意図が働いた結果ではないだろうか。沖繩を眺める当時の知識人の眼差しは様々であつたと思われるが、吉本隆明の次の文章は、この作品を通してわずかに暗示されている沖繩の意味を理解するのに、一つのヒントを与える。

わたしたちは、琉球・沖繩の存在理由を、弥生式文化の成立以前の縄文的、あるいはそれ以前の古層をあらゆる意

味で保存しているところにもとめたいとかんがえてきた。そしてこれが可能なことが立証されれば、弥生式文化Ⅱ稲作農耕社会Ⅱその支配者としての天皇(制)勢力Ⅱその支配する(国家)としての統一部族国家、といった本土の天皇制国家の優位性を誇示するのに役立ってきた連鎖的な等式を、寸断することができるとみなしてきたのである。いうまでもなく、このことは、弥生式文化の成立期から古墳時代にかけて、統一的な部族国家を成立させた大和政権を中心とした本土の歴史を、琉球・沖繩の存在の重みによつて相対化することを意味している。(傍線筆者)

『狩猟で』にごく短く登場する沖繩は、吉本が述べているような、「本土中心の国家の歴史を覆滅するだけの起爆力と伝統を抱えこんでいる」沖繩の表象には及ばなかった。しかし作品の題名を『狩猟で暮らしたわれらの先祖』としたこと、そして日本人が稲作をアイデンティティーの根幹とすることを考えれば、『狩猟民Ⅱ「山の人」・「オロッコ人」Ⅱ非大和人Ⅱ縄文人Ⅱ沖繩人』といった連鎖的な等式の暗示が読み取れる。天皇の民、本土人から眺める本土人中心の南島ではなく、日琉同祖といった時代の潮流に賛同できない沖繩からの本土への視線も込めるため、『狩猟で』の沖繩場面は必要であつたのではないだろうか。

## 五、おわりに

明治百年の時点で書かれたこの作品からは、近代社会におけ

る共同体——国家を含めて——の人為性、政治性、そしてそこから由来するその共同体自体のもろさ、揺れ動きを読み取る事ができる。そして、それはおそらく、作者の沖繩での直接経験と関係があると考えられる。前述したとおり、「祖国復帰」という当時のスローガンとは相反的に、実際沖繩人にとつては、歴史的にも情緒的にも日本を気軽に祖国として受け入れ難い面があった。大江は沖繩でそのことを肌で感じ、「山の人」「オロッコ人」「沖繩人」を通して、崩壊していく伝統的な共同体と、新たに人為的に作られていく近代の共同体を表象したと考えられる。

### 【注】

- (1) 野口武彦「現代の告発としての狂気」『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』(朝日ジャーナル、一九六九年)／黒古一夫「森の思想—死と再生の物語」『大江健三郎』(彩流社、一九八九年、三五—三六頁)／篠原 茂「現代の狂気と終末観」『大江健三郎論』(東邦出版社、一九七四年、二七三—二七四頁)／渡辺広士「解説—兩義的な小説『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』」(新潮文庫、一九七五年)。
- (2) 菅野昭正「大江健三郎論—自由の位相」(『海』、一九六九年、一〇月)／秋山駿「自己幽閉から自由へ—大江健三郎『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』」(『文芸』、一九六九年、七月)。
- (3) 高良留美子「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」(『図書新聞』、一九六九年、五月一七日)。
- (4) 本稿に引用したテクストは『大江健三郎全作品第Ⅱ期2』(新潮社、一九七七年)による。以下テクストの引用は、ページだけを明記する。
- (5) 鶴見和子「われらのうちなる原始人」(初出、一九六九年、引用は『柳田国男研究資料集成第一卷』(日本図書センター、一九八七年、三〇九頁)に拠る。
- (6) 島尾の新造語。ヤポネシアは、JAPONIA(日本)と、NESIA(島々)をひとつにくくった造語である。大陸のはずれという地図の認識を変え、日本を太平洋上につらなる弧状のネシア群の一環として位置づけ、新たな視点で「開かれた日本」の豊かな姿をとらえようという発想。排他的、中央集権的な日本人の国家意識を再構成するキーワードとして、学問分野にも広く影響をおよぼした。とくに、日本から分離して、米軍統治下に置かれていた沖繩に、新たな関心を呼びおこした点で、状況的にも強いインパクトを持った。
- (7) 島尾ミホ 外編『島尾敏雄事典』(勉誠出版、二〇〇〇年)。
- (8) 村井 紀『南島イデオロギーの発生』(太田出版、一九九五年、一一—一二頁)。
- (9) 井上 俊「日本文化の一〇〇年—社会的視点から」『文化とは』(岩波書店、一九八九年)。
- (10) 「さいきん、特にいろいろな意味で国家論というものが、いろんな人によって一応かならずふれなければいけない、つまりふれなければ一人前じゃないみたいな感じになって行なわれているわけです。」
- (11) 吉本隆明「国家論」(一九六八年、七月、世田谷社会研究会)、引用は『吉本隆明全著作集14』(勁草書房、一九七五年、三三七頁)に拠る。
- (12) 小浜逸郎「吉本隆明」(筑摩書房、一九九九年、一四七頁)。
- (13) 吉本隆明「吉本隆明全著作集11」(勁草書房、一九八五年、五〇—五二頁)。
- (14) 赤坂英雄「異人論序説」(砂子屋書房、一九八六年、二〇頁)。
- (15) 吉本隆明「幻想としての国家」(一九六七年、二月、関西大学講演)、引用は『吉本隆明全著作集14』(勁草書房、一九七五年、三二—三五頁)に拠る。
- (16) 鶴見和子「柳田国男『日本を開く』」(岩波書店、一九九七年、八八—九〇頁)。
- (17) 大江健三郎「ブラジル風のポルトガル語」(『世界』一九六四年、二月)、引用は『大江健三郎全作品6』(新潮社、一九七二年、二二〇—二二二頁)に拠る。

- (16) 折口信夫「村々の祭り」『折口信夫全集2』（中央公論社、一九九五年、四二八頁）。
- (17) 大江健三郎「遅れてきた青年」(『新潮』、一九六〇年九月〜一九六二年二月)、引用は『大江健三郎全作品4』（新潮社、一九七二年）に拠る。
- (18) 『座談会』大江健三郎の文学』『大江健三郎・再発見』（集英社、二〇〇一年）。
- (19) 赤坂憲雄 前掲書、九九頁。
- (20) 大江健三郎「すべての日本にとっての沖繩」『週刊朝日』（一九六七年、二月）。
- (21) 松原正毅 外編『世界民族問題事典』（平凡社、一九九五年）。
- (22) 大江健三郎 前掲書。
- (23) 大江健三郎 前掲書。
- (24) 対談「柳田学・折口学・茂吉短歌」(『日本の文学』第二六卷、「柳田国男・斎藤茂吉・折口信夫」月報、一九六九年七月)、引用は『柳田国男研究資料集成第11巻』（日本図書センター、一九八七年、二六〇頁）に拠る。
- (25) 吉本隆明「異族の論理」(『文芸』、一九六九年二月)、引用は『吉本隆明全著作集(続)10』（勁草書房、一九七八年、二〇二頁）に拠る。
- (26) 吉本隆明 前掲書、二〇二頁。

(ソ) インソン 筑波大学大学院博士課程

人文社会科学研究所 総合文学)